

救命救急センターが業務を始めました

4月1日に総合大雄会病院、5月1日に市民病院と、相次いで2カ所の救命救急センターが業務を開始しました。県内の各医療圏では、すでに13カ所の救命救急センターが整備され、一宮市と稲沢市で構成する尾張西部医療圏だけが未整備となっていました。数年前から総合大雄会病院と市民病院が開設に向けて準備を進めてきました。このたび、国の承認を受け、開設の運びとなったものです。

救命救急センターの目的は、適切な治療を直ちに行わないと生命に危険が及ぶ重症患者への医療を確保することにあります。そのため原則として、重症および複数の診療科領域にわたる重篤な救急患者すべてを、24時間体制で必ず受け入れることが求められます。医師・看護師・医療技師なども十分な体制を整えなければなりませんし、施設面でも、集中治療室（ICU）、準集中治療室（HCU）などの専用病床や専用診察室・緊急検査室・放射線撮影室・手術室などを設けなければなりません。尾張西部医療圏には、稲沢市民病院・木曾川市民病院・一宮西病院・厚生連尾西病院・泰玄会病院など、救急医療にご理解のある病院が数多くあり、年間を通じて協力しながら、皆さんの安心を守っていただいています。さらに2つの病院が救命救急センターとして機能することになり、救急医療体制の

充実ぶりは全国に誇れるものになりました。

一方、産科医がいなかったために出産できない、小児科医不足で子どもの急患に対応できない、救急車が搬送先を探すのに大変な苦勞をするなど、医療崩壊ともいえる状況が各地で見られます。出産間近の妊婦が脳出血を起し、病院をたらい回しにされたあげく命を落とした事件は記憶に新しいところです。

兵庫県丹波市では、2人いた県立病院の小児科医が1人になり、あまりの負担に耐えられなくなつて退職の意向を示しました。病院の小児科がなくなるかもしれないと知つたお母さんたちは、話し合いの場を持ちました。母親の1人が語つた体験談を紹介します。

「ぜんそくの子どもを連れて夜間救急を受診した。夜8時に病院に行くと、30人ほどが待つていた。やっと順番が回つてきたのが午前2時。入院が決まり、病室に通されたのは明け方の4時だった。そのまま寝てしまい、翌朝目を覚ますと、処置しておきましたという先生の手紙が置いてあった。そして翌日も普段どおりに診療している先生を見た時、先生が寝ていないことに気が付いた。うちの子の病氣のこと考えたら、病院の小児科がなくなるのは、ほんまに困るんや。でも先生のあるな姿見とつたら、やめんといて」とは、
「よう言わん。」

病院の実情を知つたお母さんたちは、「地域医療を育てる会」や「病院の小児科を守る会」をつくり、ホームページや冊子を通じて「コンビニ受診を控えよう」という運動を始めました。これは、無理をして受診を我慢するということではありません。軽症にもかかわらず自己都合で、救急のための夜間外来を受診するのはやめよう。本当に必要なときに必要な方が医療を受けられるように、また病院の医師の負担を減らすためにも、病院とかかりつけ医を使い分けるように呼び掛ける運動です。「お医者さんに感謝の気持ちを伝えよう」という呼び掛けもしています。疲れきつた医師や看護師には、何よりも励みになるでしょう。

救命救急センターは皆さんの命を守る最後の砦です。丹波市の話は人ごとではありません。いつでも、いつまでも、病院のスタッフが情熱を持つて働くことができるよう、皆さんの力で守つていただきたいと思います。

